

江戸の文化と 心を伝える

公益財団法人 東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館 館長

竹内 誠

Makoto Takeuchi

東京都墨田区に開館し、来年には二〇周年を迎える東京都江戸東京博物館。来館者はのべ三〇〇万人を超え、今や国の内外に認知される博物館だ。その構想段階からかわり、一九九八年からは館長を務める竹内誠さんは、他の博物館に先駆けて体験型展示の充実を図るなど、斬新な手法で同館の成長を支えてきた。江戸文化史の研究者でもある竹内館長に、江戸の魅力から博物館のあり方まで、幅広く語っていただいた。

「江戸」を感じて育ち、研究の道へ

——江戸東京博物館は、江戸から東京に至る歴史や文化を楽しみながら学べる博物館ですね。竹内館長ご自身は江戸文化史の研究者として活躍されてきました。どのような経緯でその道を志されたのですか。

竹内 私は昭和八年（一九三三）に東京の人形町に生まれましたが、親にとつては遅くできた子供でした。父親は明治十七年（一八八四）生まれです。そんな父も遅くにできた子で、父の父つまり私の祖父の生まれは天保八年（一八三七）です。大塩平八郎の乱があった年で、ペリー

来航などはそれからもつと後。幕末前の江戸時代に生まれた人が、私の祖父なんです。

私は小さいころから、江戸の話や唄を父からずいぶん聞かされました。父もまた、祖父からいろいろな話を聞かされて、それを私に語り伝えてくれたのでしよう。私はずっと「江戸は遠くない」と感じていました。

——江戸時代を身近に体感しながら大きくなられたんですね。

竹内 ええ。ごく普通の下町の子供として育ちましたが、いつも学校から帰ると「大門通りで遊ぼう」って、うちのすぐそばの通りに友達を誘っていたんです。近くには玄治店という横町があったり、楽屋新道という通りがあったり、楽屋風呂という銭湯もありました。子供の私は意識していなかったのですが、みんな江戸ゆかりの俗称地名や銭湯の名前だったんです。

「大門」とは、吉原遊郭の正門（正面入口）のことです。その吉

原は明暦三年（一六五七）の大火で焼け、浅草の「新吉原」に移りました。元の場所は「元吉原」と呼ばれるようになりましたが、その近辺で昭和の時代に生まれた私が「大門通りで遊ぼう」なんて言っていたわけですよ。

——玄治店というのも江戸以来の名前ですか。

竹内 玄治店は歌舞伎の『与話情・浮名横櫛』の科白に出てきますね。楽屋新道とか楽屋風呂というの、江戸時代の人形町辺りは堺町・葺屋町と呼ばれる芝居町で、中村座・市村座という二つの芝居小屋があったんです。楽屋に通ずる道が楽屋新道と呼ばれるようになり、その楽屋がなくなつた後、明治の時代に銭湯がつくられて楽屋風呂という名前が残つたのでしよう。

考えてみると、私は江戸の地名に囲まれつつ、父の話に江戸の雰囲気を感じながら育つたわけですよ。私は、こうした自分の生い立ちの経験の中から、江戸の研究に傾いたのだと思います。

——東京教育大学（現筑波大学）では江戸幕府の政治史を研究さ

れました。

竹内 江戸の経済史から政治史にアプローチする方法で研究を進めましたが、だんだん「ちょっと違うな」と疑問が湧いてきました。江戸の歴史の研究でも、私がやりたいのは人間の衣食住や日常生活に関する歴史。幕府の財政などの「数字」だけで研究を済ませるわけにはいかないと考えたのです。

大学二、三年の頃、恩師の西山松之助先生が『家元ものがたり』（秀英出版）を執筆される際に、「お家元のところで僕が聞く話をメモしてください」と、私に声を掛けてくださいました。私は先生のかばん持ちとして、表千家・裏千家・江戸千家の茶道から、香道や華道、長唄・河東節・萩江節といった邦楽の家元まで訪ねて回り、その芸も見せてもらって話を聞くことができましたのです。萩江節を語ってくださったお家元など、最初はお年を召しているなあと私は拝見していたのですが、つやのある声で実演されるやいなや、二〇歳くらい若返って見えて驚きました。芸というのは凄いものですね。



7階建ての江戸東京博物館。開館以来の来館者は3000万人にも上る（分館の江戸東京たても園を含む）。写真提供：東京都江戸東京博物館



たけうち・まこと●1933年、東京都中央区生まれ。東京教育大学文学部史学科卒業、同大学大学院文学研究科博士課程修了。専攻は江戸文化史・近世都市史。信州大学助教授・東京学芸大学教授・立正大学教授などを経て、1998年4月に東京都江戸東京博物館の館長に就任した。主な著書に『江戸と大坂』『現代に生きる江戸談義十番』（以上、小学館）、『元禄人間模様』（角川書店）、『江戸の盛り場・考』（教育出版）、『江戸社会史の研究』（弘文堂）などがある。このほか、NHK大河ドラマ、金曜時代劇などの時代考証も務めた。

伝統的な家元だけでなく、大衆芸能の大神楽とか、家元と名がつけば訪ね歩き、一七代目・松井源水さんには、こま回しを目の前で見せてもらいました。これも神業に近い見事な芸芸でした。

——貴重なご経験から江戸の文化的な知識も得られたんですね。

体験型の博物館を目指す

——竹内館長は、江戸東京博物館の構想の段階から、かかわっていらしたと聞いています。

竹内 ええ。それより以前に、西山先生が江戸町人研究会という勉強会を立ち上げ、私どもを指

導しながら、客観性のある「江戸学」を学問的に位置付けてくださいました。『江戸学事典』（弘文堂）がその成果です。

竹内 続いて西山先生の門下生の小木新造さんが「江戸東京学」を提

げで、知識というより、自然と体に沁み込みました。しばらくして、私は江戸の文化史や社会史を中心に研究するようになります。結局、自分自身のさまざまな実体験が、江戸東京博物館の仕事にも役立つことになったのだと思います。

唱したんです。「江戸・東京学」ではなく、江戸と東京という二つの時代を一括してとらえ、人の暮らしもそうした視座から研究しよう。そのコンセプトから当館も「江戸東京博物館」ではなく、「江戸東京博物館」なのです。

江戸東京学の具体的な研究は、民俗学・考古学・建築学など多様な専門家たちがさまざまな切り口で進めました。私も江戸文化史の専門家として加わり、みんなで『江戸東京学事典』（三省堂）という分厚い本をまとめました。この本が江戸東京博物館の構想に貢献することになり、現在でも展示の企画などのために参照されています。

——お手元にお持ちいただいたこの事典は、一九八七年刊となつています。博物館が開館する六年前ですね。

竹内 『江戸東京学事典』に携わったメンバーから、私も含めた五人の大学の研究者が展示監修委員会をつくり、江戸東京博物館の構想を練りました。当時の鈴木俊一東京都知事からは「学問的検証にきちんと堪えうる展示を」と言われていたので、五人を中心に

二〇〇名余りの研究者で開館準備を進めました。私はいろいろな先生に「ご指導ください」と頭を下げる係でしたが、三代目の館長になりまして、今年で就任一四年目になります。

——展示について外部から注文が付くことはなかったですか。

竹内 それはいろいろなありました。一つだけ例を挙げると、女性団体の代表がお見えになって「男性の考える展示は男性オンリーの歴史になるでしょうから、ぜひ女性コーナーをつくってください」とおっしゃったんです。それに対し、私は「逆差別になりませんか」と。そこからああだこうだの議論に発展して、私は「歴史は男と女でつくるものですから、展示のあらゆるところに女性を出しましょう」と約束することになったんです。

そこで考えた展示の一つが、長屋でのお産の場面です。長屋の展示というと、職人や棒手振り商人（注）を見せるといった内容が多いと思いますが、当館ではお産婆さんが赤ちゃんをたらいに入れ、産湯を使っている場面を再現しまし

た。これには多くのお客様がびっくりされましたね。

(注) 天秤棒を担いで魚や野菜を売り歩く商人

長屋でのお産の場面という展示の意義は、時とともに変化してきました。どういうことかというと、今は病院でお産をする時代になり、お産婆さんを見掛けなくなりましたね。そうすると、子供連れのお母さんが「あの人は誰でもしょう、おばあちゃんかしら」と、展示を見て首をかしげるんです。そろそろ歴史的職業としてお産婆さんの解説も付けないといけなくなってきました。そんなふうに表示は、時とともに、いわば「成長」していくものなのです。

——館内には江戸後期の日本橋の姿も再現されていますね。実際の橋の北側半分、長さは一四間分(約二五メートル)もあります。

竹内 パリのオルセー美術館に行ったときに、その発想が浮かびました。オルセーの建物はかつての駅舎で、大きな空間が吹き抜けになっていきます。本当のことを言うと、実物大の日本橋を新しい博

物館の入口につながる野外のアプローチとして再現できないかと考えていました。しかし、その構想は実現しなかったため、博物館の建物の中に橋の一部を再現したわけです。

私は、「既存の博物館とは異なる体験型の博物館をつくりたい」という思いがありました。江戸の絵画には木造の太鼓橋を思わせる日本橋がよく描かれていますね。「ちよつと勾配が大げさではないか」というように見えるのですが、実際の設計通りに再現してみると、それが誇張でないことが分かります。お客様が欄干を頼りにこわごわ渡っていることもあります。でも、「これが江戸日本橋の歩き心地なのか」と体験してもらいたいのです。

——千両箱や、火消しのとびが振る纏などを手にできる体験コーナーもありますね。博物館が体験型の手法を多用することに批判などはなかったですか。

竹内 「テーマパークじゃあるまいし」などという声は、すぐに消えました。来館すると体験型の良さを分かっていただけなのでし



博物館の常設展示室には、浮世絵や絵巻、着物の展示も。江戸後期の日本橋の北側半分(左上)や、棟割長屋での暮らし(右上)も実物大で復元。写真提供:東京都江戸東京博物館

よう。現在では、私どもの手法が全国の博物館に広がっていますね。また常設展示のスタンスとして、展示物を一点ずつ見せるのではなく、いろいろな展示が構成する空間全体で一つのテーマを表現するようにしています。そのような努力が実って「この博物館は何度来ても楽しいね」と言ってくださるお客様が多いんです。全体のお客様のうち、リピーターが約



三五%もいらつしやいます。

江戸のコーナーにおける展示の内容は、庶民の暮らしが中心です。江戸の文化は生活の中から生まれています。浮世絵も、家々の壁や柱に張られた曆から生まれ、やがて絵師・彫師・摺師の職人が技を合わせた三位一体の多色摺りの版画(錦絵)になりました。今や何十万円もする芸術品として扱われますが、江戸では蕎麦一



杯ほど、一六文で買える日用品だったのです。

江戸の手作りの職人の技は、当時、世界最高の水準でした。髪の毛の職人も、手塩にかけて作り、気に入らない物は商品にしません。画一的に作られてはいなく、は、一つ一つに個性があって、買う人も自分の髪に合った物を選

人々に開かれた博物館でありたい

——博物館の運営のあり方については、どうお考えですか。

竹内 江戸東京博物館では、三つの「S」から成る「3S方針」を立てて、運営に当たっています。その第一はセーフティーな運営を実行することです。お客様はもちろん、博物館で働く職員も含めた全員の安全・安心を確保した上で運営しなければいけません。

んで大切に使っていました。

私は、江戸文化の神髄は「心と質」にあると考えています。二〇世紀は「物と量」の時代でした。大量生産・大量消費の暮らしから、二一世紀の新しい暮らしに向かう中で、江戸文化に学ぶところはたくさんあるように思います。

展示物についても、例えば地震が来ても壊れない展示の仕方を心掛けています。

第二はサービスを充実させることです。お客様が江戸東京の歴史を楽しみながら学べるように質の高い展示をしなければいけません。また、お客様には外国人の方も、ハンディキャップのある方もいらっしやいます。職員は、誰に対しても優しく、おもてなしの心をもつて対応させていただくようにしています。さらに、博物館として地域へのサービスもしなければいけないと考えています。四月末の連休に開催された「両国にぎわい祭り」というイベ

ントでは、私どもが事務局を引き受けています。国技館の方々、JRや地下鉄の駅で働く方々、地元商工会や町会の方々と一緒に準備や運営をして、最後は打ち上げもしますから、今ではお互い顔なじみになりました。

——地域に根差した活動ですね。

竹内 地域と日常的なつながりができると、博物館にとって大きいですね。両国駅で「博物館はどこ？」と迷っているお客様には、駅員さんが懇切丁寧に案内してくださいます（笑）。

それから第三の「S」はセンス。オブ・ワンダー、つまり感動する博物館にしようということです。博物館は知識を覚えるところではないと思います。知よりも情や五感に訴える、心を揺さぶる博物館でありたいですね。

——博物館の近くに、東京スカイツリーという新名所もできました。

竹内 鍛形蕙斎という絵師の『江戸一目図屏風』（岡山県指定重要文化財）には、当時の江戸の景観が鳥瞰図として描かれています。それと同じ眺めを東京スカ

イツリーの展望台から楽しむことができます。ただし、『屏風』の景観は水と緑があふれ、お堀や江戸城も美しいのに対し、現在の東京の景観は水も緑も減り、比較になりません。江戸の昔と変わりにあるのは隅田川ぐらいです。その景観の違いと隅田川が存在に人々が気付くと、現在進行中の隅田川再生の取り組みが後押しされ、東京再生の起爆剤の一つになるのではないのでしょうか。私はそんな予感がします。

東京スカイツリーのお客様の流れは、江戸東京博物館にもつながると思います。小さな子供から定年後の方々まで、多様なお客様がいらっしやるでしょう。博物館は生涯学習の拠点です。さらに、館内レストランでの食事や、ミュージアム・ショップでの買い物も目的のお客様がいらしてもいい。どの年代の方にも楽しい場として、また、生きがいとなるものを提供できる場として博物館を人々に開いていきたいですね。

——本日は、貴重なお話をどうもありがとうございました。（インタビュー）情報サービス局長 鮎瀬典夫